

第71回 全国人権・同和教育研究大会に参加して（三重県津市）

11月30～12月1日（土～日） 参加者 伊集院中 福永 昭彦

特別報告

昨年度の三重県の研究大会で地元の青年や高校生が私たちに問いかけた言葉である。

「部落問題の当事者って誰ですか？」

「“部落問題を自分事にする”って、一体、何をどうすることですか？」

「みなさんは、差別を残す当事者ですか？」「それとも、差別をなくす当事者ですか？」

特別報告資料の冒頭にあった言葉だ。この言葉が頭の中を巡った。

開会行事での特別報告は、いつも自分を見つめ、自分と重ねる時間を与えてくれる。今回は上記のテーマに沿って数名の様々な職種の方が思いを語ってくれた。

（会社員報告）

私が中学校の頃、部落の友人に誘われて学習会に参加しました。参加していることを祖母に話したら、「行かんでいい」と言われました。私は友人の誘いを断り、参加を控えました。中2の修学旅行で部落差別について学ぶ機会がありました。そのときに学習会の内容や友人の顔を思い出しました。そして祖母の差別に気づきました。しかし、自分も差別していたのではないかと思えてきました。「なんで祖母は差別するんやろ」と思いましたが、刷り込まれてきた祖母を非難するのは少し違うと思いました。「祖母を変えるのは難しい。しかし僕より下の世代に伝えることはできるのではないか。」と思いました。その後は友人と共に学習会に参加しました。参加を通して「つながることが楽しい」と感じはじめました。また、「祖母が悪いわけではないこと」に気づきました。

最後に、だから今の自分がある。と締めくくった。

（教師）

母から「自分の町が差別されるのはおかしい」と幾度か聞かされました。私は憤りを感じながらも、自分が“しょうがい”のある方を差別していることに気づかされました。私は「部落で差別され、“しょうがい”のある方を差別していた。」だから、学び続けなければならないと思っています。

私は温かい町で子育てがしたいと願っています。教師になり、子どもたちや我が子に「差別に負けてほしくない」「発信する力を持ってほしい」と考えるようになってきました。子どもたちの不安行動の現れが相手を攻撃する「いじめ」であると感じていました。私は学級経営で「なかまをつなぎたい」「勉強を分かるようにしたい」それによって自信をつけさせたいと思い、実践を続けてきました。

（保護者）

子どもが小学校低学年の頃、学校でのトラブルのあまりの多さに、他の保護者から「なんであんなの子は他の子と同じようにできん？」と言われました。子どもにそのイライラをぶつけることがありました。そのうち、子どもがかわいく思えなくなり、子どもを無視するようになりました。学校からの連絡にも出なくなりました。辛かった……。学年が変わり、若い教師から「めっちゃ人気者」「おもしろい」と、褒められました。先生がよく家庭訪問して下さるようになり、子どもも喜び楽しい時間となりました。先生がわたしにとっての初めてのママ友となりました。ある日子どもが「オレ先生大好きや、先生になれんかな。」と言ってくれました。もし、私と同じ思いをしている保護者がいたら今度はわたしが受けとめ、その人のママ友になってあげたい。